

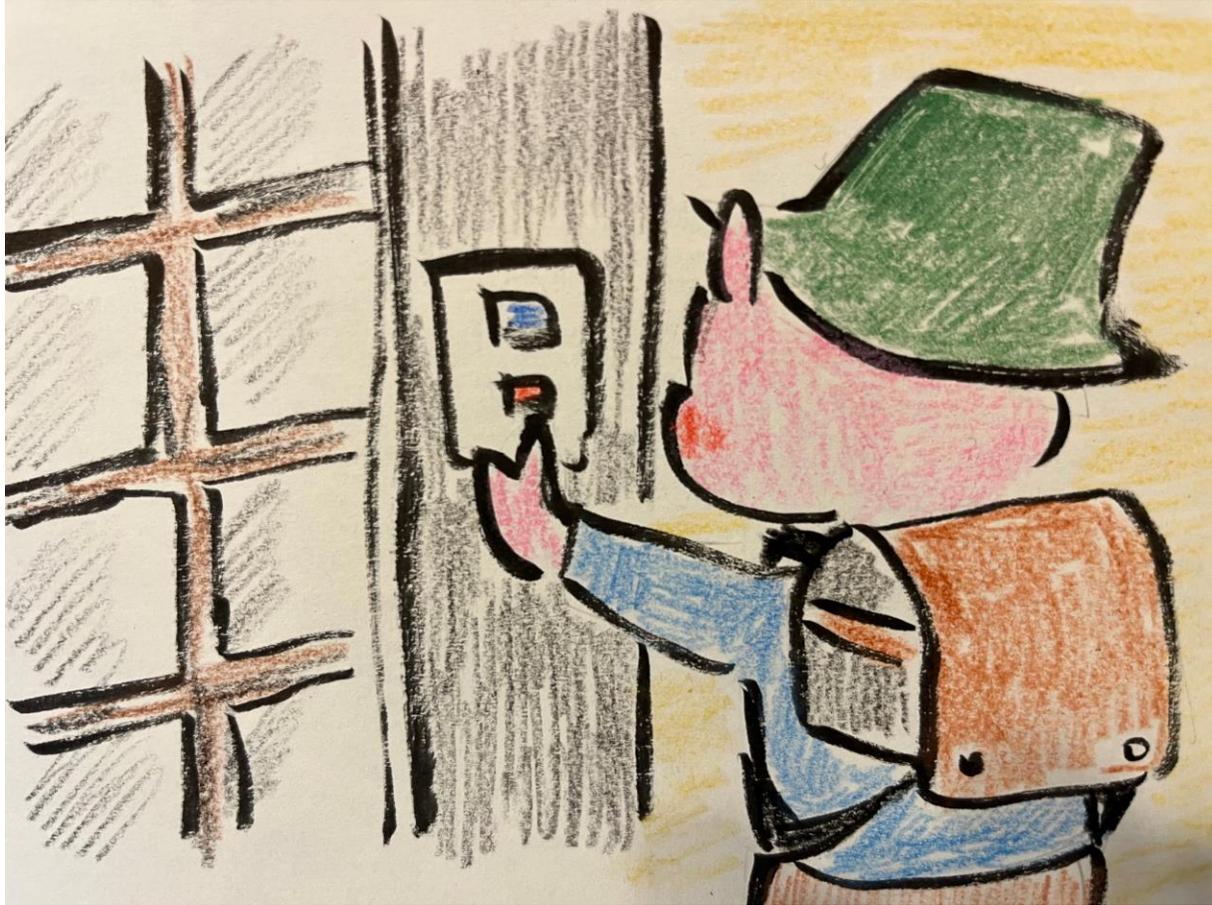
テンちゃんのはな

2026年 立花吾孺の森小学校

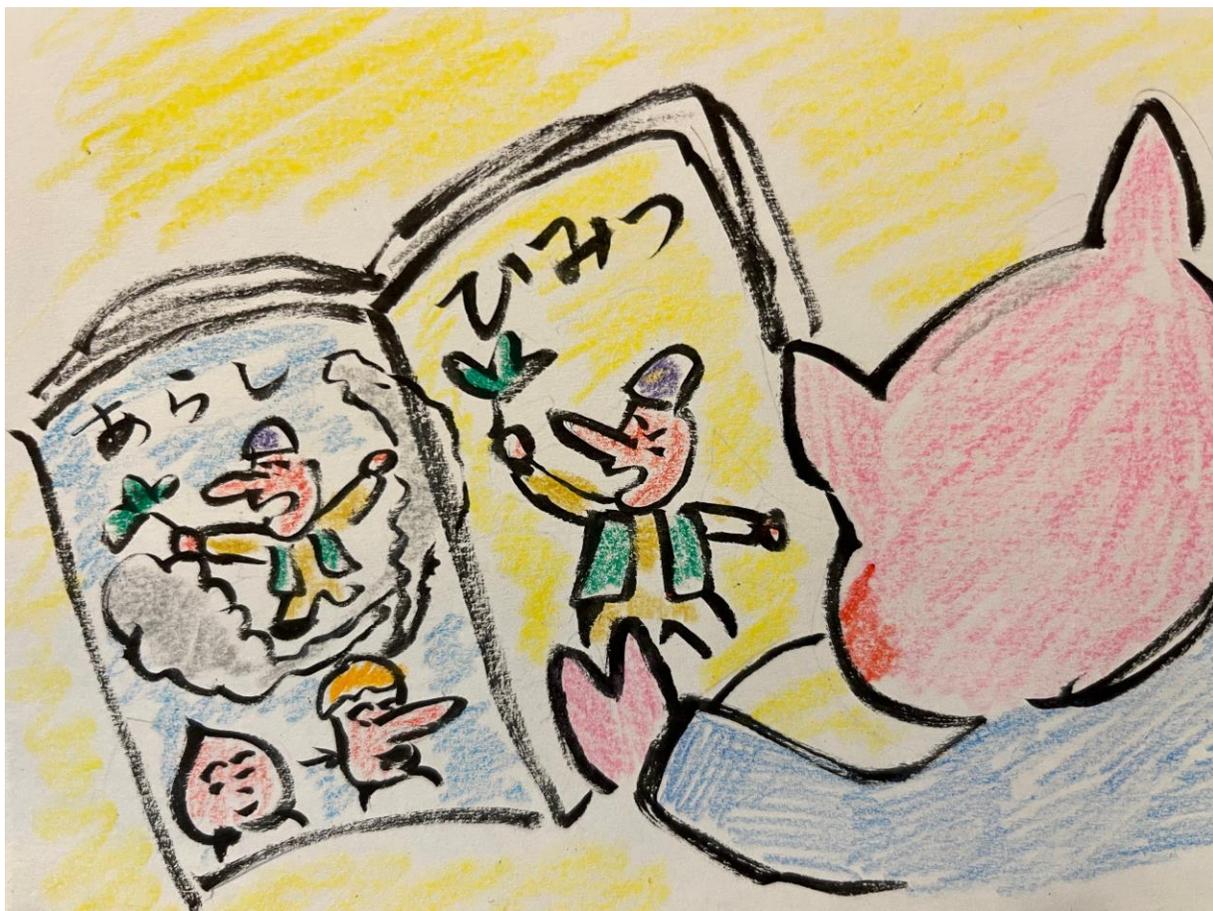


ポケットに手を入れて走ってしまったために転んでしまったテンちゃんは大事な鼻を折ってしまいました。

天狗のテンちゃんにとっては自慢の鼻だったので、このままでは外に出ることもできないと、テンちゃんは悩んでいました。

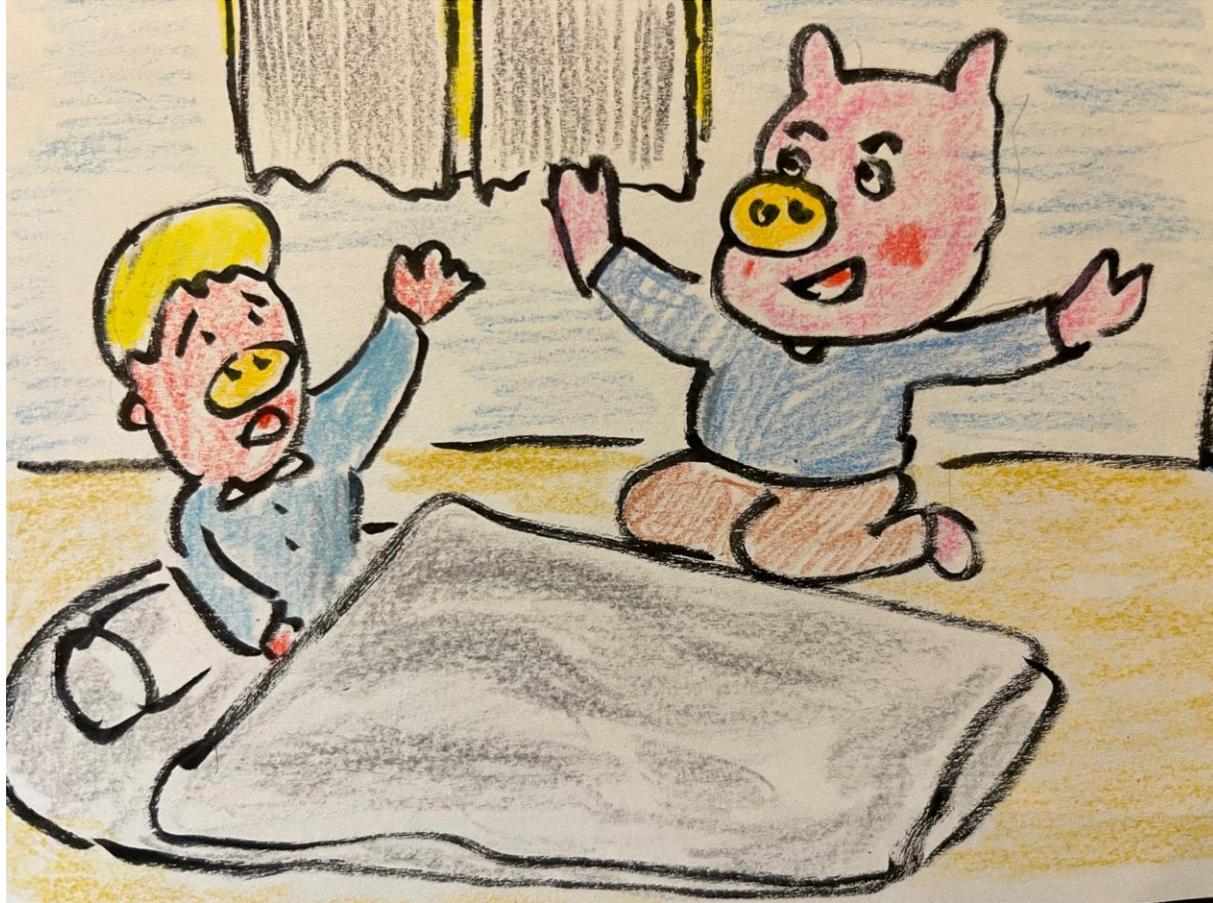


親友のブタちゃんが学校に行こうよと、毎日むかえに来てくれるのですが、テンちゃんはお休みをしていました。ブタちゃんは心配をしながらも鼻を治すことは誰にもできないのでどうしたらいいのだろうとなやんでいました。



そんな時、図書館で本を読んでいたブタちゃんはすごいことが書いてある本を見つけ、興奮してしまいました。

天狗の世界では、小さい頃は鼻は人間ぐらいの大きさなのですが良いことをするたびに少しずつ大きく立派な鼻になっていくのだという伝説が書いてあったのです。



ブタちゃんはすぐにテンちゃんの家に行きました。そして家の中で元気をなくして寝こんでいるテンちゃんに、あの本の話の話を早速聞かせてあげました

「テンちゃん天狗は良いことをするたびに鼻が大きくなるということだよ。それならば折れてしまった鼻は、良いことをするたびに大きくなっていくんじゃないかな。ためしてみようよ。ここで寝ていてもしょうがないよ。とにかく良いことをしてみよう。」



町に出てみましたが、いざ良いことをしようと思っても何をすればいいのか、ふたりはなやんでしまいました。

ちょうどハンバーガーショップの前を通りかかった時です。たくさんの荷物を持ったおじさんがハンバーガーとコーヒーをトレイにのせて歩いているのを見つけました。

あの人を助けてあげよう。



ブタちゃんとテンちゃんは、その人の近くに行き、ハンバーガーのトレイを無理やりにをとろうとしました。何も知らないお客さんはあわててしまい「何をやるんですか！！」とおこり出してしまいました。トレイはハンバーガーをのせたまま、ひっくり返ってしまいました。おじさん、ごめんなさい。結局、人にめいわくをかけてしまいました。良いことどころか、悪いことをしてしまったのです。



2人はまた町を歩いて行きました。
小さな女の子が一人で公園のトイレの前でポツンと立っていました。困っているように見えます。
二人はまいごにちがいないと、女の子に近づいていきました。「お母さんとはぐれたんでしょ？ぼくたちが探してあげるよ。」と、女の子の腕をとり引っ張って行こうとした時です。大きな声が叫び声がしてきました。



「あなたたち うちの子に何を
するの！」
お母さんは公園のトイレに入り、
女の子は外で待っていただけ
だったのです。
ごめんなさい。



「だめだ。良いことをしようとするとうまくいかない。もう鼻はなおらないんだ。」

二人はかたを落とし、トボトボとブタちゃんの住むファミリーランドに帰ってきました。

ここはブタちゃんやその家族、そして親せきがみんな仲良くくらししている小さな村です。

夜ごはんの時間が近づき、おいしいにおいがしているのではないかと鼻をクンクンさせたブタちゃんが、いつもとちがうにおいがしていることに気が付きました。「あれっ？ごはんのにおいじゃない！」



「何かがこげているにおいがする！」
ブタちゃんがあたりを見渡すと、ファミリーランドの裏にある大きな山から赤い炎がちらちらと見えるのです。これは大変です。山火事です。みるみるうちにその炎が大きくなってきました。
「大変だ！」



ブタちゃんは、大声で叫びました。「みんな火事だよ。逃げないと大変だ。」

テンちゃんも叫びました。「火事だ、火事だ、大変だ。」

あわてたファミリーランドのブタちゃんたちがひなんを開始しました。家には大事なものを置いたままです。

「早く逃げて、命の方が大事だよ。」ブタちゃんが叫びました。



ところが山火事はどんどん大きくなっています。
このままではブタちゃんたちの家だけではなく、近くの村までが燃えてしまうかもしれません。

「ぼくが行くよ！
それーっ！！」
テンちゃんの大きな声が聞こえました。



テンちゃんが大きなつばさを広げ、空高くまい上がりました。手に大きなうちわをもって風をふかせ始めました。



「こう見えても、ぼくは天狗だぞ。天狗は風をあやつり、嵐を引き起こすことだってできるんだぞ！」

「そーれ！風よ起これ、嵐よ起これ！そして大雨よ、あの炎を消しさるのだ。」



信じられないような光景が広がりました。テンちゃんのかげ声とともに、雲がうずを巻き始め、嵐が起きたのです。山火事の真上からたくさんの雨が降り注いでいきました。ブタちゃんたちもずぶぬれになってテンちゃんのことを見上げています。



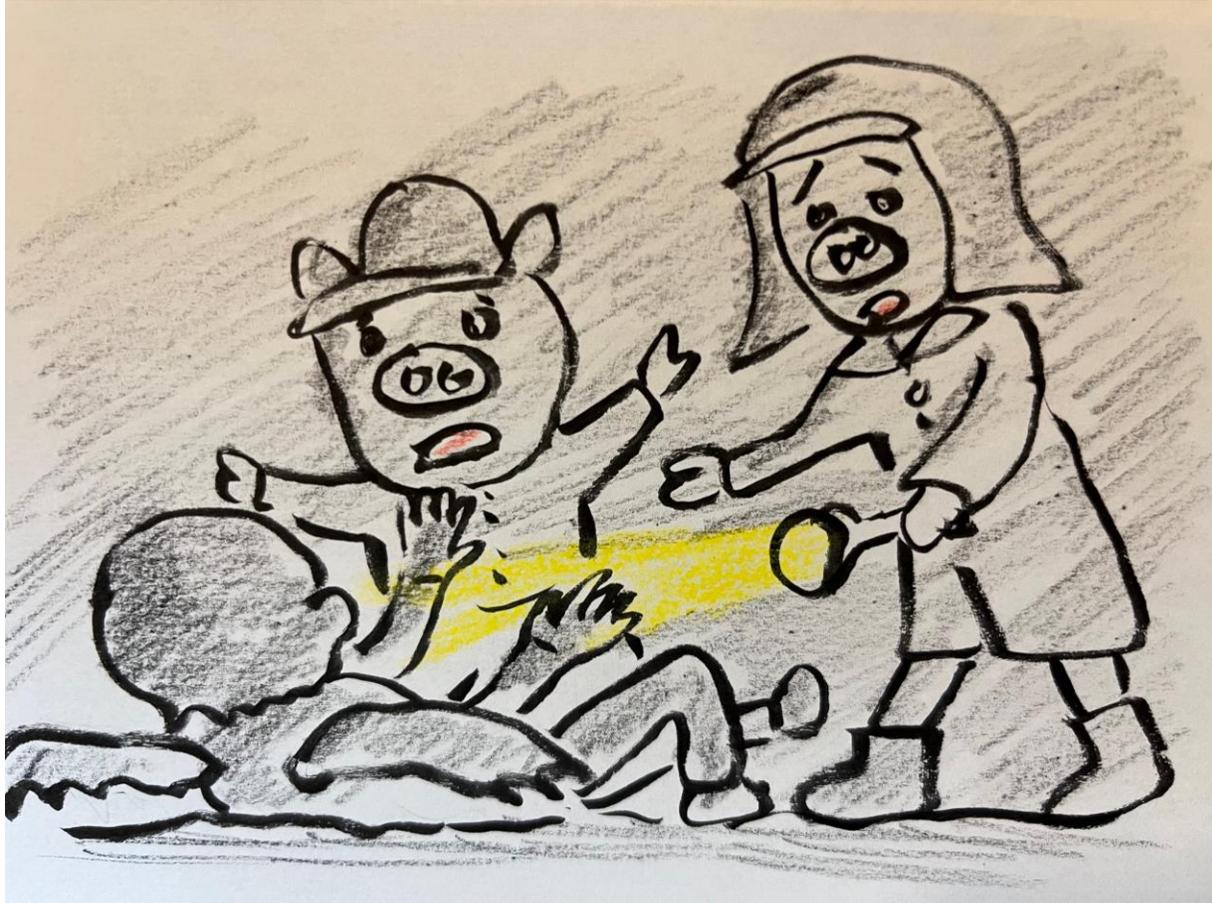
「テンちゃん、頑張って！もう少しだ！」

嵐は一時間ほど続きました。
そして、雨がやんだ時、山火事は消えていました。
山は燃えましたが、ブタちゃんたちの家も、他の家もみんな守られました。



雨がやんだファミリーランドの
広場の真ん中に、ぐったりとし
たテンちゃんがたおれていまし
た。

ブタちゃんがかけ寄りました。



「テンちゃん、大丈夫？」

ブタちゃんの声が何度も何度も
くり返されました。

そして、ようやくテンちゃんが
目をあけました。

「ブタちゃん・・・
みんな ぶじなの？」

「うん、テンちゃんのおかげで
みんな無事だったんだ。
火事も消えたんだよ。」



村長さんがテンちゃんの顔をライトで照らしました。

しずかに笑いながらうなづくテンちゃんの顔がみえました。
そして、長い長い鼻もライトに照らされていました。

おわり

2026年 立花吾孺の森小学校
越智 健一郎 作画